The Black Prince における芸術観と物語構造の関わり
―ポリフォニーとメタフィクションの観点から―

祢　木　雅　哉

私が修士論文で取り上げた *The Black Prince* において、最初の語り手とは異なる語り手が登場する点が特徴的であると言える。その点からこの作品を見ると、登場人物たちの言葉は他者から意識されているため、一つの言語の中に異なった対立する意味があると考察した Heusel の論について注目した。本論文では彼女が考察していない点から、どのような相互作用をもたらしているのかを深堀りし、Murdoch の芸術観がどのように描かれているのかを明らかにすることを目的にしている。

第1章では、研究の手法として取り扱ったポリフォニーやメタフィクションという用語の解説や、研究対象にした作品の構造との関わりについて簡単に説明している。上記で述べた語り手の一人である Bradley の手記が批判されることから、物語が虚構であるというメタフィクションの指摘や、そこに Mikhail Mikhailovich Bakhtin の考える言葉の意味の複数性（ポリフォニー）といった指摘が出来るのではないかと考えた。

第2章では、この作品における Bradley の手記と他の登場人物たちの手記との関係性について、外部構造と名付け、その相互作用を論じた。彼の手記に現れた人物たちが、その内容は事実ではないと批判する。特に、その一人である Rachel と Bradley との語り方の特徴について比較してみると、前者は説得性を損なおうとしているもの、後者は説得性を保とうとするものとして考えることが出来、真実は何かという問題が説得性の問題になっていることを指摘した。その他の執筆者も Bradley の手記の内容を批判しているが、信憑性のある発言をしているわけではない。最後に Bradley を擁護した人物である Loxias は、Bradley の手記の中に真実があるという旨の発言を行う。それが、読者を再びこの作品 *The Black Prince* を最初から読むことに誘導するため、この物語が循環構造になっており、真実が何かということがわからない構造になっていることを明らかにした。

第3章では、Bradley の手記、これを内部構造と名付け、その中で Bradley や Julian が *Hamlet* を取り上げている場面から、相対化作用がどのようなものかを論じた。*Hamlet* について彼らが言及している箇所は二つあり、前者は Bradley が Julian に *Hamlet* を講義している場面、後者は Julian が Hamlet の黒い衣装を纏い、Bradley に披露する場面である。両者から、Bradley は、Hamlet に見られるような、自身や身の回りの環境の不安定さ、言葉の意味の相対化に影響を受けているのではないかと指摘した。その後、Bradley は友人 Arnold を殺した疑いで尋問されている時も、さながら道化のような振舞いをする。Julian との性行為後、Murdoch が考えるような道徳や創造性を得て、Bradley はこれまで躊躇していた物語執筆が出来ることを直感する。Julian と性行為するまで取っていた自分自身が精神的に傷つくことを恐れるような態度から変化が感じられ、自分の価値の相対化作用によるものだということを明らかにした。

2章と3章の内容を整理すると、内部構造の手記において相対化作用は、Bradley に物語執筆の大きな要

因を与えたが、皮肉なことに外部構造において、その手記は他者に批判され、循環構造を生み出すことから作品全体において真実を伝達することが出来ないのである。Bradley の手記を滑稽だと馬鹿にする Rachel に対して、編集者 Loxias は Bradley の滑稽さを肯定している。この Loxias の発言から、何が真実かを特定することが困難な世界に身を置き、複雑な現実世界を示すきっかけになった Bradley を肯定していると考えられる。そのような彼の行動から判断すると、彼女の芸術観は、複数の意味を持つ言葉がもたらす登場人物たちの相互作用を描き出すことによって、より複雑な現実世界を描こうとするものであると考えられる。